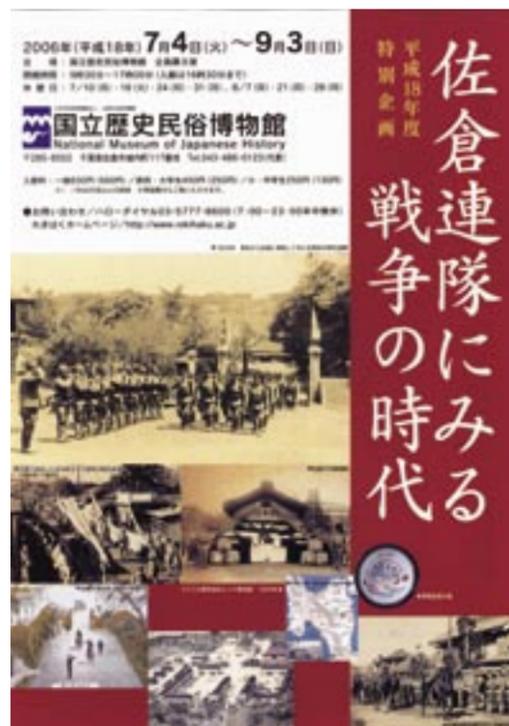


戦争をどう伝えるか——「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」を振り返って

話し手 根津朝彦 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻
聞き手 白石厚郎 ジャーナリスト

「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」(2006年8月3日～4日実施)は、歴博による近代日本の戦争を扱った初めての戦争展示企画「佐倉連隊にみる戦争の時代」(2006年7月4日～9月3日)の開催を契機に、学生企画事業として立案された。本プロジェクトを中心的に推進した根津朝彦さんに、企画意図、成果などについて聞く。



国立歴史民俗博物館で開催された特別企画展「佐倉連隊にみる戦争の時代」のチラシと、展示会場。



——プロジェクトの概要を教えてください。

具体的には、歴博の「佐倉連隊にみる戦争の時代」を含む4つの博物館の戦争展示と2本の映画を見学・鑑賞し、歴博宿舎や大会議室で意見交換を重ねるといった形をとりました。歴博以外の博物館は、2006年に新設された戦病者資料を展示する「しょうけい館」、戦中・戦後の国民生活に関する資料を収集した「昭和館」、靖国神社の歴史観を代表すると言われる「遊就館」です。映画は遊就館での『私たちは忘れない!』と、歴博で上映した『ゆきゆきて、神軍』です。

留学生3人を含む4専攻の総研大生13名、他大学の院生3名の計16人が参加しています。終了後、全員が感想文を提出し、感想文集として体験と成果を共有することができました。

——立案の趣旨について、ひとことお願いします。

背景として、まず、いわゆる戦争体験の風化の問題があります。近年、戦争体験者の減少とともに、戦争のトータルな記憶、とくにリアルな部分の記憶は伝わりにくくなっています。例えば、日本軍兵士の死因として飢餓ないし病気が大きな割合を占めていたといったことは、若い世代では知らない人が多いのではないのでしょうか。私は歴史研究を通じて考えていく立場ですが、どのように戦争を伝えていくかは、すでに「戦争を知らない世代」の課題になっていると思います。

戦後はまだ終わっていないとよくいわれますが、国立の博物館である歴博が近代日本の戦争展示を初めて行ったことを契機に、これからの博物館の戦争展示にどのような可能性があるのか、院生たちとの議論を通じて歴史研究の立場から考えていきたい、というのが立案の趣旨です。

——比較見学という形にしたことに、とくに理由がありますか。

複数の対象を比較することで、主体的に意見をつくりや

すくなるのではないかと期待しました。また、性格や立場の異なる展示、映画を選んだのは、ディスカッションの前提として多角的な視点を用意しておきたかったからです。たとえば遊就館は、映画『私たちは忘れない!』も含めて、ある意味で、いわゆる大東亜戦争を肯定していると受け止められる展示の仕方をとっています。それに対してドキュメンタリー映画『ゆきゆきて、神軍』は、昭和天皇の戦争責任を追及する面など、まったく対照的な歴史観を含んでいます。そういう振れ幅の大きい見方を素材に議論する中で、この問題を考えていこうと思いました。

——どのような意見が出ましたか。

留学生も積極的に参加して、多岐にわたる論点について活発な意見交換がなされました。今後の研究の方向を示唆するものに絞ると、「さまざまな視点からのアプローチを提示することによって、見る側に主体的な判断力をはたらかせるような展示にすべき」といった内容が複数ありました。

また、留学生の発言には私たちの問題意識と重なるものもあり、一例として、「旧日本帝国圏の朝鮮、台湾、満洲などの人たちの暮らしぶりをいっしょに展示しないと、戦争全体の影響がはっきり見えてこない」という指摘を挙げておきます。

なお、十分に論議をつくす時間はなかったのですが、鑑賞者のリテラシーという基本的なところで、「展示されている資料自体は、よく見れば戦争の実相を伝えているものが少なくなく、展示者側の構成意図にかかわらず、まず、そこから何を読み取ることができるかが大切である」という共通認識をもてたことは幸運でした。

——本プロジェクトの最大の成果は?

戦争展示の可能性を論じる中で、その背景にある多様な歴史観について認識を深めるとともに、それぞれの研究分野での視野が広がったこと、また今後の方向として、グローバルな枠組みでの考察の重要性を確認できたことです。

——課題として、とくに気づいた点はありますか。

先の、見る側のリテラシーの問題なのですが、今回の参加者は男女半々であったのに、感想文のほとんどは、戦争イコール兵士、イコール男のような視線に引っ張られていました。研究の蓄積があるにもかかわらず、ジェンダーへの視点が抜け落ちてしまったことは、自身を含めて大きな反省材料としてとらえています。

——プロジェクトを振り返って、ひとこと。

今回の議論は、具体的な結論をすぐに求められるものではありません。その意味でも、「戦争資料館と戦跡・基地



根津朝彦(ねづ・ともひこ)
研究テーマは戦後ジャーナリズム史。指導してほしい研究者が歴博にいたことから総研大を志望。歴博に来て、研究上の関心と博物館の戦争展示の問題が重なり、今回のプロジェクト誕生のきっかけとなった。大学時代、桑原武夫に傾倒。さまざまな人材を集結させる学際的コーディネーターとしての才能に憧れていた。

の比較見学プロジェクト—沖縄から戦争展示を考える」(2007年2月10～14日実施)に、本プロジェクトの趣旨が発展的に引き継がれたことは大きな収穫です。また新聞二紙で紹介され、社会的にも関心を引くことができました。

私も含めて1年生が多かったのですが、早いうちに他の専攻の人たちと交流しておけば、さまざまな視点をもちやすくなります。今回の経験は、私たちの研究論文に生きてくると信じています。さらに今回の出会いから、あらたな発想の学際的ネットワークが生まれることを願っています。



「博物館と戦争展示の比較見学プロジェクト」の参加者たち。